第30回　四条烏丸西北の界隈

■ 新町通を歩く

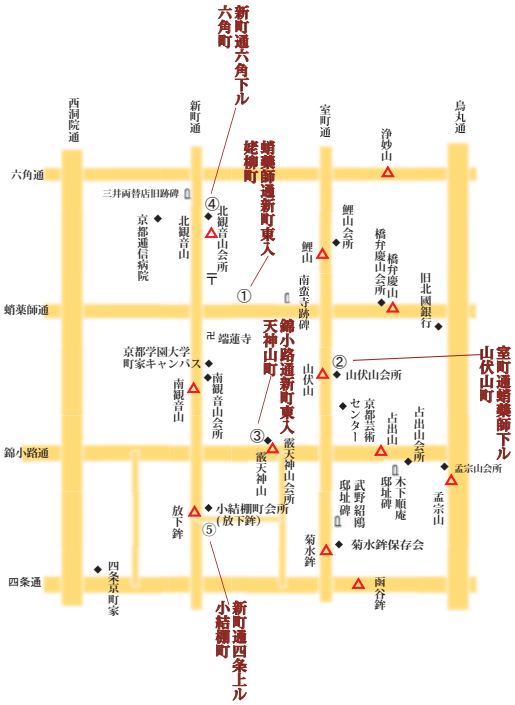
今回は、前回回ったブロックのちょうど南側です。このブロックからも、祇園祭のときには、多くの山鉾が参加します。新町通と六角通の辻から、新町通を南下することにしましょう。

■ 北観音山

六角通に面する西洞院から新町までの一角は、京都逓信病院が占めています。もともとは逓信省の職域病院。日本郵政公社をへて、現在は日本郵政株式会社の企業立病院となっています。

新町通に面したところに通用門があり、その北隣の建物の前に、三井両替店旧址の碑があります。駒札には、越後屋（のちの三越）を創始した三井高利の事跡がまとめられています。ここは、長く三井家の邸宅となっていましたが、京都逓信病院の建築敷地として昭和三十一年に売却されました。同家にあった常盤殿は、京都逓信病院が建築される際に、祇園の八坂神社境内に移築されています。

京都逓信病院の通用門の真向かいに、上上（ええ）もん屋という呉服屋が店を構えていますが、これは、北観音山会所を借りて営業しています。祇園祭の折には、上上（ええ）もん屋の建物の二階が北観音山の会所となります。



町名看板の所在（四条烏丸西北の界隈）

この会所の建物の二階部分に新町通六角下る六角町④の町名看板が掲げられています。これは、「中京区」の表示が左横書になっているので、最近設置されたものです。

「北観音山」は、楊柳観音像（ようりゅうかんのんぞう）と韋駄天立像（いだてんりつぞう）を安置しています。楊柳観音は、病苦からの救済を使命とする観音菩薩です。韋駄天は、インドでは子供の病気を癒す医神の側面をもっていますので、両者を組みあわせて、病気からの平癒をねがったものでしょう。四周の設えは、豪華なもので、この町内が両替商などの豪

三井両替店旧址（駒札）

新町通（しんまちどおり）六角（ろっかく）下る（さがる）　六角町（ろっかくちょう）④

商が集まっていたことを反映しています。もと舁山（かきやま）であったものを、後に曳山（ひきやま）にあらためたので、その名残りとして真木には松の木が立てられます。「北観音山」は「上り観音山」ともいわれ、復活後の後祭の山鉾巡行の先頭にたちます。

上上（ええ）もん屋の南隣の蔵を隔てた隣に、三井ガーデンホテル京都新町別邸があります。これは、旧松坂屋京都仕入れ店をリノベーションしたもの。松坂屋といえば、江戸時代は、三井とならぶ豪商。新町通に面した外観は大店（おおだな）の構えを再現した町屋造。奥に現代風のビジネスホテル。

■ 南観音山

蛸薬師通との辻をさらに南へ。すぐに、瑞蓮寺（浄土真宗大谷派）があります。この寺の前に茶屋四郎次郎の屋敷跡として駒札がたてられています。駒札は、百足屋町町内会と南観音山保存会によるもので、十六世紀末より、朱印船貿易商として活躍した茶屋家の事跡が細かく記載されています。北隣の家には、「新町通蛸薬師下る百足屋町」の町名看板が見えます。また、足元にある消火栓の容器には、「百足屋町」の記載があります。町名は、十六世紀室町時代に百足屋（むかでや）という豪商がこのあたりにあったことに由来。

新町通をいま少し南下したところ東側に、京都学園大学京町家キャンパスがあります。京町家の小島邸の表部分「新柳居」の三部屋を使って、市民講座が随時開催されています。

京町家キャンパスの一軒置いた南隣に、南観音山会所（新町通

茶屋四郎次郎遺跡

（駒札）（瑞蓮寺壁際）

京都学園大学京町家キャンパス

南観音山会所

錦小路上る百足屋町）があります。一階部分の店舗は、（株）おたべの販売所。

「南観音山」は、楊柳観音像と善財童子を安置しています。善財童子は、菩薩道修行のため、五十三人の善智識を訪ねる旅の中で、二十八番目にに訪ねたのが、観音菩薩。観音菩薩は、人の器に応じて三十三の形体を出現するとされています。この一つの形体が、楊柳観音。南観音山は「下り観音山」ともいわれ、後祭の山鉾巡行の殿を勤めていましたが、復活した大船鉾が殿を勤めるようになりました。南観音山は、籤取らずで六番目に運行します。

■　放　下　鉾

錦小路との辻から、新町通を南下したところに放下鉾保存会会所の建物があります。京都市による駒札には、「小結棚町会所（放

下鉾）」と表題がついています。「小結棚町」の読みは、郵便番号帖などでは、「こむすびだなちょう」となっています。この読みは、「京都市の地名」（日本歴史地名体系27）でも採用されています（項目の説明文は「こゆいの棚町」などがでてくるのに「こむすびだな」は出てきません。どうみても、説明文に従えは、「こゆいだな」というのが正しいと思われます。しかし、不思議なことに、項目表題の振り仮名は「小結棚町（こむすびやまちょう）」となっているので、どうも判然としない）。項目表題の振り仮名に目をつぶると、「京都市の地名」の説明文は、各種の文献を引用しており説得力がありますので、本来は「こゆいだなちょう」と呼ばれるのが妥当でしょう。この駒札の振り仮名もこのようになっていますので、ここではこれを採用します。「小結（こゆい）」は、烏帽子と髷にもとどりを結びつける組みひものことで、この付近にこれを取り扱う店が集まっていたために町名に採用されたものです。

京都市による駒札のうしろに、「新町通四条上る小結棚町」⑤の町名看板（新）が設置されています。「中京区」が左横書であることから、最近設置された看板です。数年前に調査したときには、同じ場所に京都ロイヤルライオンズクラブの町名看板（旧）が設置されていましたので、ごく最近に仁丹の町名看板に置き換えられたものでしょう。念のため、新旧の看板の写真を載せます。京都ロイヤルライオンズクラブの町名看板も、資料的な価値があるので、個人的な感想をいえば、このような置き換えは、望ましくなく、旧町名看板も残して併置すべきでしょう。

「放下鉾（ほうかぼこ）」の名前の由来は、真木のなかほどの「天王座（てんのうざ）」に天王人形として放下僧の像を祀っていることにより

放下鉾保存会会所

（新、仁丹看板）
新町通（しんまちどおり）　四条（しじょう）　上る（あがる）　小結棚町（こゆいだなちょう）⑤

（旧、ライオンズクラブ）

ます。鉾の上には、「三光丸（さんこうまる）」と名づけられた稚児人形を飾っており、巡行時には、稚児舞いができるように作られています。

ちなみに、放下僧とは、鞠や刀などを投げたり受け止めたりする大道芸をおこなう僧形の芸人（のちに僧形で無いものもあらわれる）を差します。祇園祭の山鉾は、謡曲に典拠を置くものが多いので、多分、放下鉾の形式も、謡曲「放下僧（ほうかぞう）」（放下と放下僧に身をやつした兄弟が、父の敵を討つという話）をに基づくのではないでしょうか。

最近では、放下芸は、太神楽（だいかぐら）の一ジャンルとして、寄席で演じられます。たとえば、海老一染太郎・染之助（最近逝去されました）。

■　室町通を歩く

今度は、六角通と室町通の辻から、室町通を南下してみましょう。

■　鯉　山

室町通の東側駐車場の南隣に、「鯉山」（室町通六角下る鯉山町）の会所があります。「登竜門　鯉山」の看板がかかっています。結界の注連縄（しめなわ）をくぐった細い路地の奥が、会所になっており、宵山の折にはにぎやかにかざりたてられます。

「鯉山」は、「登龍門」の故事に因んでつくられた山。後祭で巡行します。御神体の鯉は一メートル半近くある木彫。龍門の滝を登り切って龍となった鯉を見事に写しています。宵山では、会所の内部で、この鯉の彫り物を間近に見ることができます。

鯉山会所

さらに室町通を南下すると、西側に和菓子店「永楽屋室町店」（室町通蛸薬師上る鯉山町）の重厚な建物があります。室町通のこのあたりは、マンションか駐車場なので、余計に目立ちます。柚子こごり（琥珀）や羊羹などの竿ものが旨い。

■　山　伏　山

室町通を、蛸薬師通との交差点から、さらに南下すると、東側に、山伏山の会所があります。この建物の二階には、「山伏山町家」と扁額が架かっており、この「町家」は、「まちや」ではなく、「ちょういえ」と読むらしい。普段は、ふじやとみひろ商事がここで営業しています。

「山伏山」のご神体は、山伏浄蔵貴所（じょうぞうきしょ）です。右手に数珠、左手

山伏山会所

に斧、腰に法螺貝をつけ、笈を背負った、大峰入りの姿を写しています。八坂の法観寺の塔が傾いたとき法力で直したと伝えられています。

浄蔵貴所（八九一～九六四）は、三善清行（本シリーズ第２回）の子。平安時代中期、天台宗の僧で、加持祈祷をよくしたと伝えられています。死んだ父を蘇生させた一条戻り橋の話は有名。

『都名所図会』巻一には、「戻橋」の項があり、その中で浄蔵貴所の奇譚を次のように記しています。

又、三善清行死する時、子の浄蔵父に逢はんため、熊野葛城を出でて入洛し、此橋を過ぐるに及んで、父の喪送に遇ふ。棺を止めて橋上に置き、肝胆を摧き、念珠を揉み、大小の神祇を祈り、遂に咒力陀羅尼の徳によって、閻羅王界に徹し、父清行忽　蘇生す。浄蔵涙を揮うて父を抱き、家に帰る。これより名づけて世人戻橋と云ふ。是洛陽の名橋なり。

室町通　蛸藥師　下ル　山伏山町②

山伏山会所（山伏山町家）の建物の二階部分北端の柱に、町名看板「室町通蛸藥師下ル山伏山町」②が、設置されています。中京区ではなく「下京區」が右からの一行書きになっていることから、もともと存在した看板であることがわかります。

■　京都芸術センター

山伏山会所の二軒おいた南に、京都芸術センターがあります。これは、元の明倫小学校をリノベーションしたもの。平成十二年開館。製作室、ギャラリー、講堂、図書室、喫茶店などを備えた芸術振興の拠点施設。リノベーションのあとでも、元の明倫小学校の施設が、いかに重厚であったがうかがえます。

京都芸術センター（元明倫小学校）

明倫小学校の場所には、江戸期を通じて、心学塾の「明倫舎（めいりんしゃ）」がありました。その跡地を明治二年（一八六九）に小学校に転用したものです。もともと、「明倫舎」は、手島堵庵（てじまとあん）が、天明二年（一七八二）に鴨川東岸三条上るに創始したものですが、天明の大火により消失したため、寛政元年（一七八九）、ここ占出山町で再開されたものです。

明倫学区

京都市は、かって、日本で最初の六十四校の番組小学校に起源をもつ、学区に分割されていました。現在は、公式の行政機能をもつわけではないが、地域行政・住民自治の単位として、機能しています。現況は、京都市自治会・町内会＆NPOおうえんポータルサイトをご覧ください。

http://www5.city.kyoto.jp/chiiki-npo/jichikai/gakku.php

明倫小学校は、現在廃校となり、建物は京都芸術センターとしてリノベーションされていますが、明倫学区は、今なお、地域活動単位（明倫自治連合会）として機能しています。明倫学区は、二十七の町内会（釜座町、衣棚町、御倉町、三条町、了頓図子町、烏帽子屋町、饅頭屋町、西六角町、玉蔵町、骨屋町、六角町、鯉山町、七観音町、不動町、姥柳町、橋弁慶町、百足屋町、山伏山町、手洗水町、西錦小路町、天神山町、占出山町、炭之座町、小結棚町、観音堂町、菊水鉾町、笋町（たかんなちょう））があり、北は三条通、南は四条通、東は烏丸通、西は西洞院通に囲まれた地域で、その町内の多くは、祇園祭の山鉾を出しています。「明倫ニュース」を機関紙として刊行しています。http://www.meirin-news.com/

大黒庵武野紹鷗邸址の碑と菊水の井跡の碑

■　菊水井と武野紹鷗邸址

錦小路通をわたって、室町通をさらに南下すると、マンションLatticeがあり、ここに菊水鉾保存会が入居しています。このマンションは、かっての金剛流能舞台の跡地です。その前の駐車スペースの一角に、「大黒庵武野紹鷗邸址」の碑（中京区室町通四条上る東側）があります。この碑の傍らに、「菊水の井跡」の碑があり、武野紹鷗邸にあった、菊水の井の説明が記載されています。

『改訂京都民俗志』には「室町の菊水」の項があり、祇園祭の菊水鉾が菊水井に因むこと、井戸は民家のうちに残っていることを述べたのち、つぎのように記載しています。

室町の菊水

（前略）

菊水の水は茶によいので、昔あたりに珠光が住み、紹鷗もその近くに庵を結んで大黒庵と号した。庵名はすぐ北に恵比寿社と恵比寿井があったに因んで命名したのである。

『改訂京都民俗志』（井上頼寿、ワイド版東洋文庫一二九、平凡社、一九六八、二七ページ）

菊水の井の名の由来は、謡曲「菊慈童（きくじどう）」。菊の葉から滴り落ちた雫が菊水の流れとなり、これを汲んで七百歳の長寿を得たという故事に拠っています。菊水鉾は、菊水の井に由来します。菊水鉾の稚児人形は、「菊慈童（きくじどう）」の舞姿。

菊水鉾保存会のあるマンションの南、少し離れた焼き鳥屋の南隣に菊水鉾保存会の収蔵庫があります。注連縄で結界を張っていますのですぐにわかります。すぐ南隣のビルは、室町四条の交差点です。

■　蛸薬師通を歩く

東西の通として、蛸薬師通を西洞院から烏丸まで歩いてみましょう。

菊水鉾保存会（収蔵庫）

■　南蛮寺跡

まず、新町通との交差点を少し東へ行ったところ。北側にある炉辺焼の店の二階部分に、町名看板「蛸薬師通新町東入姥柳町」①が見つかります。「下京區」が右一行書になっていますので、古くから設置された町名看板です。以前調査したときには、もともと「下京區」とあったところを「中京區」と訂正されていましたが、今回の調査の看板ではもとに戻したようです。

さらに、東へ。北側のビルの通用門とところに、「南蛮寺跡」の碑。織田信長の庇護のもとに、イエズス会によって建てられた南蛮寺は、姥柳町の付近にあったといいます。一時は、多数の信者をかかえたが、豊臣秀吉の宣教師追放令（一五八七）により、破壊されました。

蛸薬師通（たこやくしどおり）　新町（しんまち）　東入（ひがしいる）　姥柳町（うばやなぎちょう）①

■　橋弁慶山

蛸薬師通をさらに東に進むと、北側に橋弁慶山の町家があります。取材が夕刻になってしまい、他の会所の写真とは趣の違うものになりました。烏丸通から五軒目。普段は和の商品のギャラリーになっています。祇園祭の際には、町家奥の収蔵庫から出した御神体を二階に飾ります。

「橋弁慶山」は、後祭に巡行します。弁慶と牛若丸が五条大橋で戦う姿をあらわしており、謡曲の「橋弁慶」に基づいています。謡曲の「橋弁慶」のあらましは、本シリーズ第三回の「義経

南蛮寺跡の碑

（駒札）

伝説と五条天神宮」のところで触れてあります。橋弁慶山では、牛若丸は橋の欄干の擬宝珠の上に足駄の前歯だけで立っていると趣向。前回で述べた浄妙山と比肩できる、すばらしさです。

蛸薬師通と烏丸通の交差点の西南角（烏丸通蛸薬師下る手洗水町）にある赤レンガの建物は、旧北國銀行京都支店（旧山口銀行京都支店）です。辰野金吾の設計で一九一六年竣工。今は内部を改装して、商業施設 flowing KARASUMA として、ディーン＆デルーカ京都カフェなどがテナントとして営業しています。

橋弁慶山会所

■　錦小路通を歩く

錦小路通を西洞院から烏丸まで歩いてみましょう。

■　炭座の辻子

しばらく歩くと、炭之座町の通りとT字路で交差するところに来ます。この通りは、南行すると相生餅食堂のところで四条通に抜けられます。『京町鑑』では、横町の項にある「錦小路」に接する縦町として、「㋟炭座辻子一名地獄辻子とも云。南へ行ば四条通へ出る也」と記載されています。㋟印は、横町に付いた縦

錦小路通　新町　東入　天神山町③

町を表示しています。炭座の辻子の呼称は、現在では使われないようで、路地途中に設置してある京都市広報版には、「中京区四条新町通西入る上る炭之座町」と表示されています。また『京都市の地名』では、「中京区錦小路新町西入る下る炭之座町」と記載されています。「西入る上る」や「西入る下る」の表示は、なるほどと思います。

なお、江戸期の文書では、「辻子」という表記が多用されます。現在では、図子と書くことが多いようです。

■　霰天神山

錦小路通を歩いてゆくと、新町通をすぎたところの北側。二階建の建物の一階部分に、町名看板「錦小路通新町東入天神山町」③が貼り付けてあります。「中京區」となっていますが、「中」はあとから訂正したものとはっきりわかります。

少しだけ東へ進むと、注連縄が張ってある一角があり、そこが霰天神山会所（町家）（錦小路室町西入る天神山町）。

永正年間（一五〇四～一一）京都大火のおりに、霰ととも一寸二分天神像が降って屋根に止まり、猛火はたちまちに消えたという奇瑞を祭ったのが霰天神山の起源。これに因んで、宵山には「火防せ、雷除け」の御守を授与。

霰天神山会所

「火の要慎」のお札をいただくのに、愛宕神社まで出向くのは体力がないと嘆く向きには、霰天神山のお札が最適。

■　木下順庵

錦小路室町東入（占出山町）南側に木下順庵邸址の碑があります。木下順庵（一六二一～一六九九）は、松永尺五に学び、一六六一より、京都在住のまま、加賀前田綱紀に出仕。一六八二よ

木下順庵邸址碑

り、江戸幕府の儒官。朱子学と古学。詩文集「錦里文集」が唯一の著書。教育者としてすぐれ、「木門十哲」（新井白石、室鳩巣、雨森芳洲など）と呼ばれるすぐれた弟子を輩出。

■ 占　出　山

木下順庵邸址の碑が設置してあるところは、じつは占出山の会所の入口です。注連縄で結界を示しています。この入口を入った奥に、社殿を構えており、傍らに占出山収蔵庫があります。

「占出山」（錦小路室町東入占出山町）は、神功皇后が肥前国松浦の小川で鮎を釣って戦勝の祈（誓約）としたという説話によるもの。御神体は右手に釣竿、左手に釣り上げた鮎もって立つ姿を写したもの。神功皇后は、安産の神として信仰が厚いので、安産祈願のお守を授与。占出山の鮎に因んで、祇園祭宵山限定で、

占出山会所

占出山収蔵庫

「吉兆あゆ」が大極殿本舗から販売されます。これは、普段は「若あゆ」と呼ばれる和菓子。

辞書を調べてみると、「占出」とは、言い出すこと。森鴎外の短編に「魚玄機」というのがあり、その中に女道士魚玄機が、「江辺柳」の三字を与えられた時に、詩を占出したというという記述があります。この言葉が、占出山に関係があるのかどうかは、わからない。

■ 孟　宗　山

錦小路通を烏丸まで出て、角から二軒目に今西電気商会がありますが、その正面看板のすぐ下には「孟宗山」と表示があります。この店の裏が、孟宗山の会所です。店の南側に孟宗山会所（烏丸

孟宗山会所

孟宗山会所駒札

通錦小路下る筍町（たかんなちょう）の入口があります。

会所の入り口南側面に、駒札が設置されています。京都市による指定有形文化財の説明。駒札の表題は、「筍町会所（孟宗山）二棟　会所家・土蔵・附地蔵堂」とあります。「筍」は、「筍」の異体字。町名では「たかんな」と読み、古くは、「たかのゝ町」。このあたりは、烏丸通のビル街で、夜間住人はゼロ。孟宗山の維持は、町内の企業およびその従業員が町内会会員となって協力。

「孟宗山」の御神体は、孟宗が母のために、雪の中で筍（たけのこ）を掘りあてた姿を写したもの。山全体は、雪中の景色。中国の史話二十四孝から取材しており、すでに、応仁の乱以前より、この町内より出されています。

プロフィール

藤田眞作〔ふじたしんさく〕。一九四四年〔昭和十九〕北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所（http://xymtex.com）を主宰。それまでの数理立体化学に関する仕事の集大成として、二〇一三年に、モノグラフ「Combinatorial Enumeration of Graphs, Three-Dimensional Structures, and Chemical Compounds」（576ページ）をセルビアの Kragujevac 大学出版局（Mathematical Chemistry Monographs シリーズ第 15 巻）より出版。さらに二〇一五年に、モノグラフ「Mathematical Stereochemistry」（437ページ）をドイツの DeGruyter 社から出版。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第30回）2017/12/20

© 2007, 2008, 2010, 2017 藤田眞作 http://xymtex.com